

奥多摩町の小・中学校はすべて コミュニティ・スクールです (学校運営協議会を設置する学校)

コミュニティ・スクールは、学校と保護者や地域の皆さんが共に知恵を出し合い、学校運営に意見を反映させることで、お互いが協働しながら子どもたちの豊かな成長を支え「地域とともにある学校づくり」を進める法律（地教行法第47条の6）に基づいた仕組みです。

コミュニティ・スクールでは、学校運営協議会を通して、学校運営に地域の声を積極的に生かし、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めていくことができます。学校運営協議会の主な役割として、

校長が作成する学校運営の基本方針を承認する

学校運営に関する意見を教育委員会又は校長に述べる
ことができる

教職員の任用に関して、教育委員会に意見を述べる
ことができる

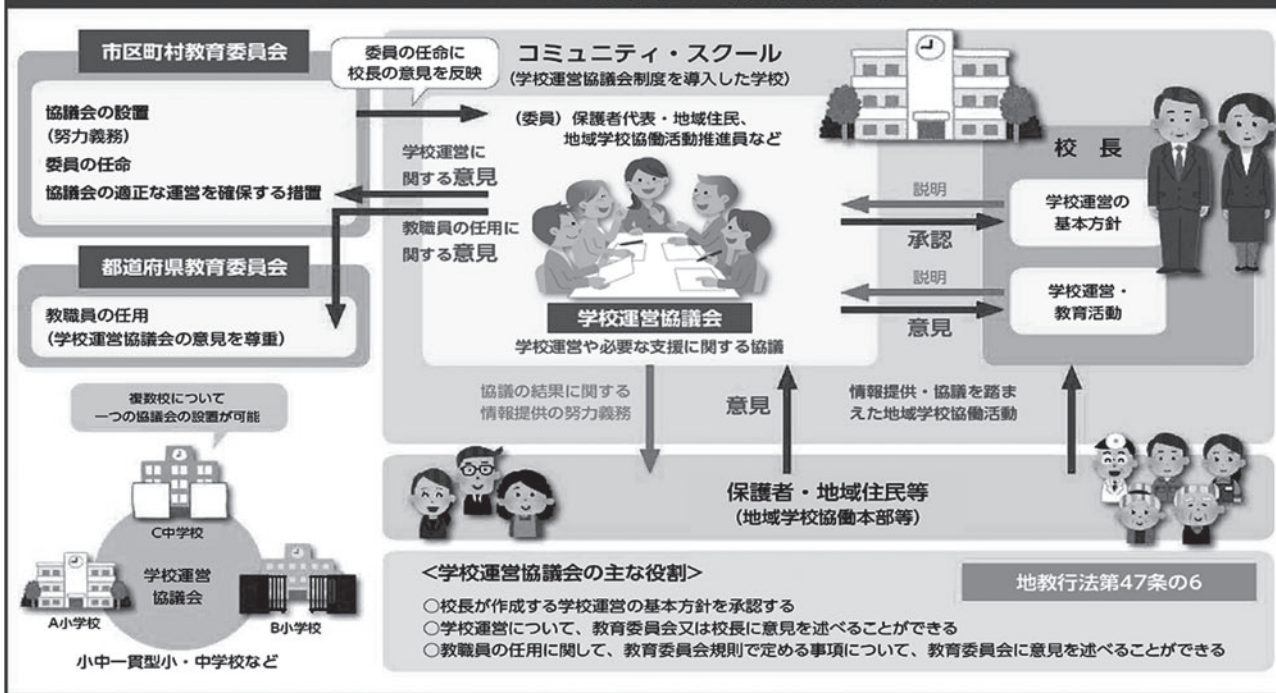
の3点があります。奥多摩町では、平成29年度から奥多摩中学校がコミュニティ・スクール制度を導入し、平成30年度からは古里小学校・氷川小学校も含め、全ての小・中学校がコミュニティ・スクールとなっています。



第217号
発行
奥多摩町教育委員会

令和元年9月1日現在
児童数 144名
生徒数 76名
教職員数 45名

コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)の仕組み



学校運営協議会委員は、古里小学校、氷川小学校、奥多摩中学校の3校共通となります。年6回会議を行い、教育活動がより一層効果的に行われるように、読み聞かせや見守りなど、地域住民や保護者の方に支援を依頼させていただく場合があります。依頼があった場合には、ぜひともご協力ください。地域、保護者、学校が一体となって、奥多摩町の子どもを育てていく、そんな学校を目指します。

古里小学校の特色ある教育活動

古里小学校の教育目標は、「いのちを大切に 共に輝き 生きていこう」です。この教育目標を達成するため、「かしこく」「なかよく」「たくましく」という3つの観点で取り組んでいます。

かしこく 学ぶ楽しさを知り、学びを生活に生かせる子に

○確かな学力の育成

- ・授業のユニバーサルデザイン化
- ・校内研究主題「自分の力をもち、表現できる児童の育成」

○挑戦・努力の機会の設定

- ・音読集会、校長室暗誦検定
- ・ジェシカ(AET)検定
- ・日本漢字能力検定

○個に応じた指導の充実

- ・算数習熟度別指導(全学年)
- ・補充指導の充実
教育支援員、サポート教室
- ・特別支援教育の充実
知的・情緒学級、特別支援教室
羽村特別支援学校との連携
- ・専門機関との連携



なかよく 人と心を通わせ、人のために自分の力を生かせる子に

○自分を大切にする心の育成

- ・自己肯定感・自尊感情を高める
「認め・励ます」指導
- ・キャリア教育の推進
- ・SOSの出し方に関する教育
- ・警察・地域と連携したセーフティ教室
- ・救急法教室

○人を大切にする心の育成

- ・人権教育の推進
- ・縦割り班活動の充実
- ・いじめ防止の取組
ふれあい月間、生活アンケート
- ・古里保育園、氷川小学校、奥多摩中学校との交流
- ・地域のお年寄りとの交流



たくましく 健康で丈夫な体と、健やかで豊かな心をもつ子に

○健康増進・体力向上の取組

- ・家庭と連携による保健指導
ノーマディアカード
- ・栄養士による食育指導
- ・薬物乱用防止教室
- ・歯磨きタイム
- ・縄跳び旬間、持久走旬間
- ・週1回のロング遊び

○情操教育の推進

- ・挨拶運動
- ・奥多摩の自然体験学習
わさび栽培など
- ・地域の方から学ぶ活動
よもぎ団子、押し花、篠笛など
- ・音楽集会、音楽会
- ・年3回の親子読書旬間



氷川小学校の特色ある教育活動

学校はさまざまな方策を掲げて、新しい学習指導要領の本格実施に向けて取り組んでいます。新学習指導要領実施となり令和の時代に入っても、学習の土台の基礎基本は普遍であります。

「読み・書き・計算」については、少人数委員会や学力向上委員会において、先生方で話し合いをもち組織的な実践を展開しています。その中の1つである「読み」の「読書活動」について、氷川小学校の特色ある教育として以下に紹介します。

本の読み聞かせ・・・毎週火曜日、全学年実施

高学年になるにつれ、自分で本を選び自分で本を読む習慣をつけていますが、本の世界に浸り心に栄養をつけるために、保護者・地域の方々、支援員さん等の協力により毎週火曜日の8時25分～40分の間に、本の読み聞かせを実施しております。読み聞かせの担当者により、好きなことや趣味について書かれた本、奥多摩の自然や歴史に関係した本、代々受け継がれてきた民話などが良く読まれてきましたが、子どもたちが好きそうな本をリサーチしてくださり、少しでも読書が好きになる努力をしていただいております。お陰様で、子どもたちは毎週火曜日をとっても楽しみにしております。図書支援員さんは本の貸し出しや図書室の利用について、子どもたちの意欲を高めようと工夫しています。そのご努力にプラスし本の読み聞かせの効果も相まって、低学年を中心に図書室の利用や貸し出し数が増えています。これからも地域に開かれた学校教育の一環として、この読み聞かせを継続し、1人でも多く読書が好きな子どもたちの育成を目指します。



奥多摩絵本の会 ・・・水曜日の放課後、図書支援員さんのお力で

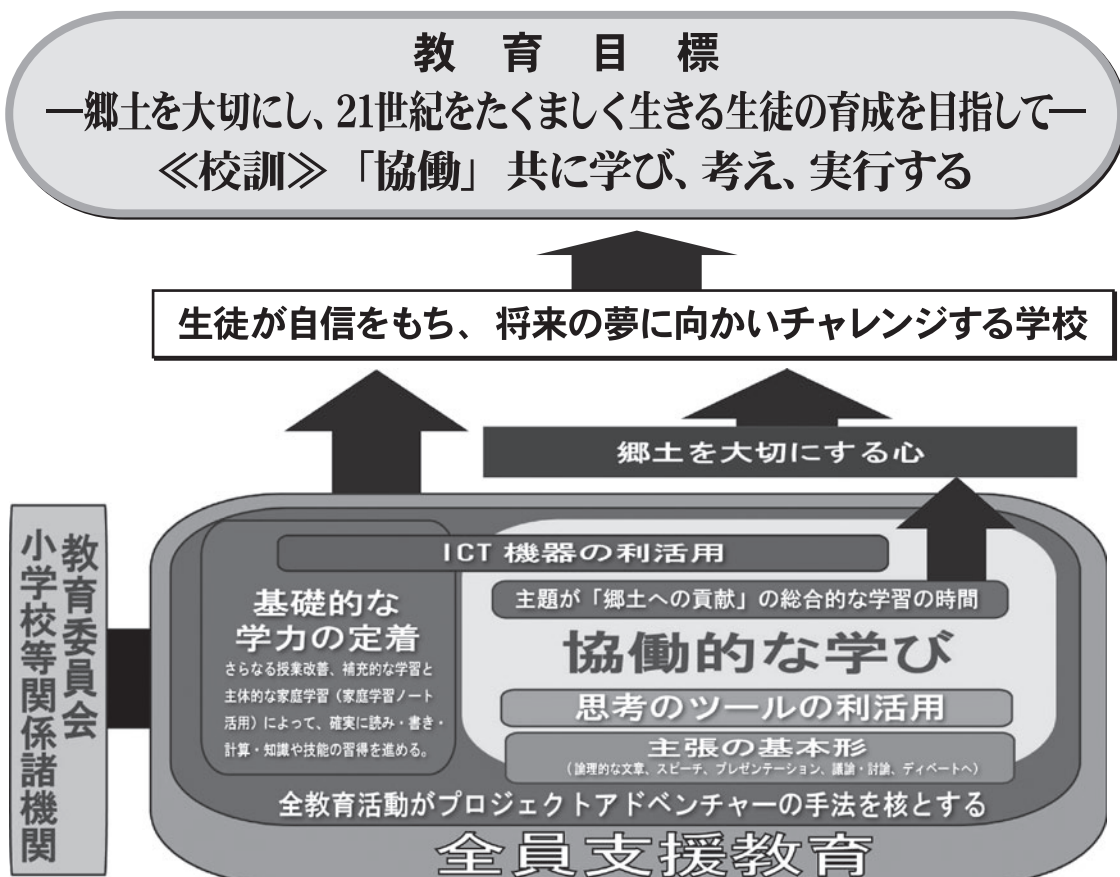
図書支援員さんとそのお仲間、そして教育支援員さんの尽力により、3か月に一度の頻度で、奥多摩絵本の会が開催されております。巨大絵本の読み聞かせをされたり、3人で劇化仕立てでお話を展開されたりして、普段の読み聞かせとは様相が変わります。子どもたちは目を輝かせて、お話の世界に入っていく、終わった後とても満足そうな顔を浮かべています。またお話の会が終わったら、創作の会が催され、造形をして絵本の世界の物や季節にかかわりのある物を作り、目と耳と手を充分に使って楽しい時間を過ごします。毎週火曜日に心を耕され、3か月に一度耕された心に、より栄養が与えられて、ますます情操豊かな子どもたちが育っていると感じます。

読書環境づくり・・・蔵書の充実、文庫貸し出し中

全校児童58人で今年はスタートしましたが、その人数では余りある蔵書が図書室にあります。6年間で読み切ることは到底難しいでしょうが、不易と流行をきちんと押さえられていて、受け継ぐべき本や感性が瑞々しい年代で読んでおきたい本だけでなく、毎年図書支援員さんが徹底的に選んできた選りすぐりの本も、図書室にはたくさんあります。本の世界に浸るには、まさにうってつけの環境が、氷川小学校の図書室にはあります。また子どもだけでなく、大人の本も文庫として展開し、廊下に貸し出ししております。子どもだけでなく大人も本を読み、氷川小全体で読書活動を励行していきます！



奥多摩中学校 特色ある教育活動



【奥多摩中学校の教育活動の構造図】

(1) 生徒の心に好奇心の灯をともし
生徒の将来の姿に
思いを馳せる

「平凡な先生はただ話す。良い先生は丁寧な先生はただ話す。良い先生は丁寧な先生はただ話す。優れた先生はやってみせてくれる。偉大な先生は心に好奇心の灯をともし。W.A.Wardの言葉

生徒たちは、本能的に向上心をもち知識・技能・能力・態度を身に付けようとして学校に来ます。人と学ぶ楽しさと醍醐味に気付かせること、そのことにより生徒の学習意欲や強い心、さらに人に貢献する喜びとチャレンジ精神を高めることを目指します。そして人とのつながりを大事にして、「生徒自身が学ぶ」という学校の機能を最大限に発揮することを大切にします。生徒に、日々の学習や体験が将来の自分にとってどういう意味があるのかを、中学生なりに理解させ、幸せになる力を伸ばしていきます。

(2) 全員支援教育

全員支援教育とは、全員を理解する教育であり、本校のすべての教育活動を支えるもので、特別支援教育の考え方や手法で、

全生徒を対象に、支援を行うというものです。特別支援教育校内委員会では、課題や困り感をもつすべての生徒を対象に、情報共有を行い、具体的な支援の仕方を協議し、全教職員が共通理解のもと、適切に支援を行います。また、教育活動にユニバーサルデザインを考えを取り入れることを進めています。

(3) 地域における学校文化を大事にする

学校は、生徒にも保護者にも魅力的なところであることを常に考えています。奥多摩だから、少人数だからできることを充実し、先取の精神で学びの質を深めることを本校の学校文化とします。「この学校に通わせたい」とそう思える学校像を目指します。また郷土を愛する心は、郷土で過ごした良き体験、共に育った仲間を通して育まれるものです。学校教育の目標を具現化していくとともに、保護者、地域の協力のもと、郷土の中で育つ自分っていいね、の心を育むことを大事にします。

郷土奥多摩(文化財)

その14

徳富蘇峰詩碑

文化財保護審議会委員

小林 奈都美

今回の郷土奥多摩の紹介は、町指定の文化財「徳富蘇峰詩碑」です。以前、郷土奥多摩その8で日食供養塔を紹介しましたが、この供養塔同様、現在は水と緑のふれあい館の石碑の小径にあります。元は、湖底の温泉神社の境内にありました。



【徳富蘇峰詩碑】

写真の詩碑には、

「登」極水源隔谷幾

村々崖峻泉鳴笕

岳高雲入軒

昭和六稔六月廿二日武州小河内

宿舎即興 蘇峰 老人

印印

とあります。読みくだしにしてみると、

「登々、水源を極め谷を隔て、

幾村々 崖けわしく、泉笕を

鳴らし 岳高く、雲軒に入る」

となります。

徳富蘇峰(1863年〜1957年)は、現、熊本県益城町出身で、明治から昭和にかけて

のジャーナリストであり、思想家・歴史家・評論家です。弟は『不如帰』の著者の徳富蘆花です。蘇峰は、『国民新聞』を主宰し、『近世日本国民史』を著したことでも知られます。蘇峰が小河内の鶴の湯を訪れたのは、自ら創立した国民新聞社を退社し(昭和4年)、『近世日本国民史』(大正7年〜昭和27年)の連載を大阪毎日新聞社・東京日日新聞社に移したころになります。9月には満州事変がおきます。

当時の奥多摩は、蘇峰来訪1カ月前の昭和6年5月に、東京市水道局長らが小河内へ来訪し、小澤市平村長へ貯水池建設の申し入れがありました。蘇峰もこのニュースは知り得ていた上での来遊であったと思われる。小河内の溪谷美、山岳美、水の豊かさに感動しながらもこの地が湖になることも想像したのでしょうか。

小河内の鶴の湯は、江戸時代以降、多くの文人雅客の来遊が知られています。昭和4年に青梅鉄道が日向和田駅より御岳駅まで延長開通し、昭和5年に御

岳―氷川間のバスが開通しました。交通機関も発達してきましたが、氷川から小河内までは、いまの〃奥多摩むかし道〃を詩碑にあるように「登」で一步一步、徒歩や馬車で進んだのでしょうか。67歳の蘇峰にとってはなかなか厳しい旅だったのではないかと想像できます。

蘇峰の石碑は、全国各地に残っています。詩碑は少なく、当時の小河内の情景がうかがえる当地の貴重な文化財です。

蘇峰の石碑は、全国各地に残っています。詩碑は少なく、当時の小河内の情景がうかがえる当地の貴重な文化財です。



【詩碑裏側 建設者氏名】